

100年後も HOPE ある町であり続けたい

～継承と蓄積のまちづくり／HOPE 計画とともに～

山形県金山町長 鈴木 洋

○100年運動の提唱と HOPE 計画の策定

～100年運動と HOPE 計画の糸を紡ぐ～

金山町の景観施策を語る上で大切な時期が幾つかありますが、昭和59年が大きな節目であったと思います。

この時期は、町の第2次基本構想の策定に取り組んでいた訳ですが、町民の目から見て分かりやすく、かつ実現可能なことを新しい町民運動として展開しようと、10の主要プロジェクト事業を選定することになりました。

その中でも、特に昭和53年に当町への来訪100周年の記念碑を建立したイギリスの女性旅行家イザベラ・バードが讃えた美しい風景と街並みなどが、昭和38年に提唱され町民とともに取り組んできた「全町美化運動」の成果も重なり合う中、次代に繋いでいくべき貴重な財産ではないかとの思いから「街並みづくり100年運動」が提唱されています。

当時、住民自治や地方自治の確立に力を注いでいた岸宏一町長（現参議院議員）の思いを町民運動として実現させるため、担当係長であった松田貢氏（前町長・故人）は長いスパンで町民のエネルギーを結集できるものが必要との考えの下、100年あれば現在の街並みを大切にしながら新しい街並みを創造できるのではないかと結論にたどり着いたそうです。

地元の銘木「金山杉」をふんだんに使った住宅が建てば単に街並みが美しくなるだけでな

く、町の林業や建設業が元気になり、コミュニティや情操教育にも効果が期待できるということでもあり、とても欲張った狙いがあったと言われています。

しかし、「100年運動」という壮大で突飛もないプロジェクトは、ややイメージ先行で進んだと考えられ、当然のようにその具現化策を模索していたとも伺っています。

こんな時、天が味方してくれたのかわかりませんが、タイミング良く HOPE 計画の話が舞い込んで来ました。岸町長のところに県を飛び越して話を頂いたようで、まさに100年運動と HOPE 計画の糸が紡がれる絶妙なタイミングだったといえます。

ここでひとつ、当時の逸話を紹介したいと思います。HOPE 計画を進めるにあたり国からは当然のように専門家の方々（いわゆるコンサルタント）を紹介頂く流れになっていた訳ですが、前述の松田係長は生意気にも断ったという逸話が残っています。

当時は、金山の美しい街並み景観に配慮した公共建築に昭和40年代から取り組んで頂いておりました林寛治氏（東京芸術大学卒／林寛治設計事務所代表）の考え方にとても共鳴しており、林氏の声掛けで片山和俊氏（同大卒、同大助手・現同大名誉教授／(有)ディック設計室代表）、住吉洋二氏（同大卒、現東京都市大学教授／(株)都市企画工房代表）の2人にも金山町の HOPE

計画～金山・杉のふるさと 雪のふる街 木のすまい～の策定スタッフとして、雪深い金山での作業にそれは深く関わって頂いたそうです。

3名の先生方は町の職員と力を合わせ、町内の物的資源の調査に着手、自然環境や歴史的資源と一体となった街並みの魅力と特性を再確認できたと言懐されています。

こうした時間と情報の積み上げが、以降の100年運動の土台となる一貫性のある体系的な景観施策につながり大きな成果をもたらしました。

そして、町民の理解と共感を得られなければ一歩も進むことができない100年運動と HOPE 計画の策定から早いもので共に30年という大きな節目を迎えようとしています。

○町民の理解と共感を得てももなく30年

～取り組みの成果と課題を編む～

金山町は以前から木材（金山杉）に関わる大工・職人が多い町ですので、高度成長期に街並みの様相が一変したことをきっかけに昭和53年に始まった住宅建築コンクールも100年運動やHOPE 計画の大切な素地になったと考えています。

特に、当時から住宅の外観（見た目）だけでなく暮らしている家族構成なども考えた平面配置やディテールにも厳しい眼を向ける町民代表の審査員は、専門家も顔負けの感性を見せることも多く、金山住宅の質を担保することにも大きく貢献してきました。

そんな中で採択された HOPE 計画の策定作業は、とても熱気に包まれていたと言います。当時、自分たちの町にあった計画を立てても構わないという基本スタンスが金山町の風土ととてもマッチしたことも大きな要因だった

のではないのでしょうか。

こうした「風景と調和した建築様式の確立」と「町全体を木造住宅のショールームに」を合言葉に産業的な要素を中核に据えて誕生した金山版の HOPE 計画は、当時全国的にも異彩を放っていたと言います。

こうした段階を踏んで昭和61年に制定されたのが、現在をベースに新たな街並みを創造することを目的とした全国的に類を見ない「金山町街並み景観条例」でした。

住宅コンクールで積み上げられ、HOPE 計画で体系化が図られた「切妻屋根」「木組みの柱」「白壁・板張り」という特徴的な街並み形成基準に合致した住宅には、最大50万円を助成するという町民運動を基盤とした支援型条例の誕生以降の27年間の累計で、助成件数1,515件、助成金2億3千万円、その対象事業費では既に91億円を超えています。

更に特筆すべきは、助成対象となった1,515件のうち地元業者が請け負った件数が72%、新築に限れば88%を占めており、請負額の6～7割ともいわれる資金が地元で還流して地域経済に大きな効果をもたらしたことも確認されており、昭和59年提唱の100年運動と同時期策定のHOPE 計画時の欲張った狙いがそれまでの金山らしさをより魅力的に高めるといったものであったことが確認され、更なる運動推進の力にもなっています。

景観助成金交付実績の対象項目別集計

(昭和61年度～平成24年度)

対象項目	助成件数 (単位：件)	内 町内業者 (単位：件／割合)	助成金累計 (単位：千円)	事業費累計 (単位：千円)
新 築	350	308／88%	122,816	7,545,967
増 改 築	182	170／93%	33,297	1,224,979
色彩変更等	983	618／63%	73,278	342,226
合 計	1,515	1,096／72%	229,391	9,113,172

こうした成果を積み上げる中、HOPE 計画 2000全国シンポジウム金山町大会は300名もの参加のもと“次代に香る木の住まい－金山杉と街並みづくり100年運動－”をテーマに開催され、熱心な討論とともに深い交流も繰り広げられました。

特に、金山町での大会開催を強く推して下さり、長く HOPE 運営委員長を務められました岩田司先生（現独立行政法人建築研究所上席研究員／筑波大学教授）はじめ、多くの運営委員の皆様には、以来「金山杉住宅仕様書」の作成や「金山杉サミット」の開催などでも幾度となくご指導を頂いており、深く感謝しております。

こうした取り組みの他にも、町民との意思統一を図るべく平成4年から続けてきましたドイツ研修事業も、今まで100名を超える各界代表の町民が参加し、その眼に焼き付けた美しい村々の風景は、次第に多くの町民にも浸透しながら、100年運動や HOPE 計画の下支えとなり町民参加の美しいまちづくりが加速したものと考えています。

ゆったりとした時間の流れの中で積み重ねてきた我が町の美しいまちづくりは、多くの方の応援も頂きながら着実にその美しさを増してきました。

具体的には、町内の全戸建て住宅に対する金山住宅の比率が約36%に高められ、基準色であるこげ茶や黒の屋根の住宅の比率に至っては約73%に達しており、長く町内に暮らす方でもその変化を感じ取れるようになっています。

こうした成果を含めて我が町の町づくりに対しては次第に高い評価を頂くこととなり、平成22年には金山町と町中心部の町づくり組織である金山地域区長サミットが「美しい街並み大賞」という景観分野の最高賞を共同受賞、多くの方の来訪という副産物とともに町民に大きな自信

と誇りをもたらしてくれました。

しかし、一方で次第に課題も浮かび上がってきました。施主や大工・職人の世代交代による意識変化とともに潜在的と思われた町民の町づくり意識の“ゆらぎ”は、平成20年のリーマンショックに端を発した経済不況の進行の中で大きな流れとなり、HOPE 計画で整理された特徴ある金山住宅の建築比率の低下が顕著になってきました。

当時の担当は、世代交代による意識変化の他にその要因を次の7点に整理しています。

- ①長引く不況と投資バランスの変化
- ②核家族化の進行と資金力の低下
- ③情報化社会とハウスメーカーの攻勢
- ④緩やかな誘導で生じた誤解の拡大
- ⑤継承する財産としての合理性の低下
- ⑥「美しく古びる」投資（維持）への不安
- ⑦建築基準法の改正と手続きの変化

当然のように町と町内業界関係者は危機感を強め、現状と課題を共有するとともにアクションプランを策定し、100年運動の再構築を目指すことを確認しました。

具体的には、

- ①次世代型の金山住宅づくり（地域モデル展示住宅の整備）
- ②「金山杉」の魅力を伝える（金山杉住宅仕様書の作成他）
- ③次世代教育の更なる充実（小学生からの関心喚起）
- ④業界自らの取り組み充実（大工・職人研修事業の実施）
- ⑤技術・デザインを含むトータルコーディネート力の底上げ
- ⑥町民、業界等への継続的な広報活動の充実
- ⑦建築情報の収集と指導の徹底（日常的かつ広範なネットワークの活用）

⑧街並み形成基準、景観条例の見直し（狙いをよりわかりやすく）

という内容でありました。

こうした時期でありましたので、地元の専門委員である阿部利広氏（阿部建築設計主宰）と町職員の有志が前述の林氏、片山氏、住吉氏の協力を得ながら、関係地域の代表とともに金山町まちなみ研究会を立ち上げ、国土交通省の支援を受け、町中心部300戸程を対象とした訪問による悉皆調査に取り組み、その成果を広く紹介するとともに、町に対する具体的な提言も頂きました。

その内容は、

- 景観条例や形成基準等の具体的な見直しポイント
- 「金山住宅」の一層の普及とPR（理念も含めて）
- 景観条例にある特定地区の将来的な指定
- 景観重要建造物等の維持保全
- 100年運動推進体制の再構築

でありました。

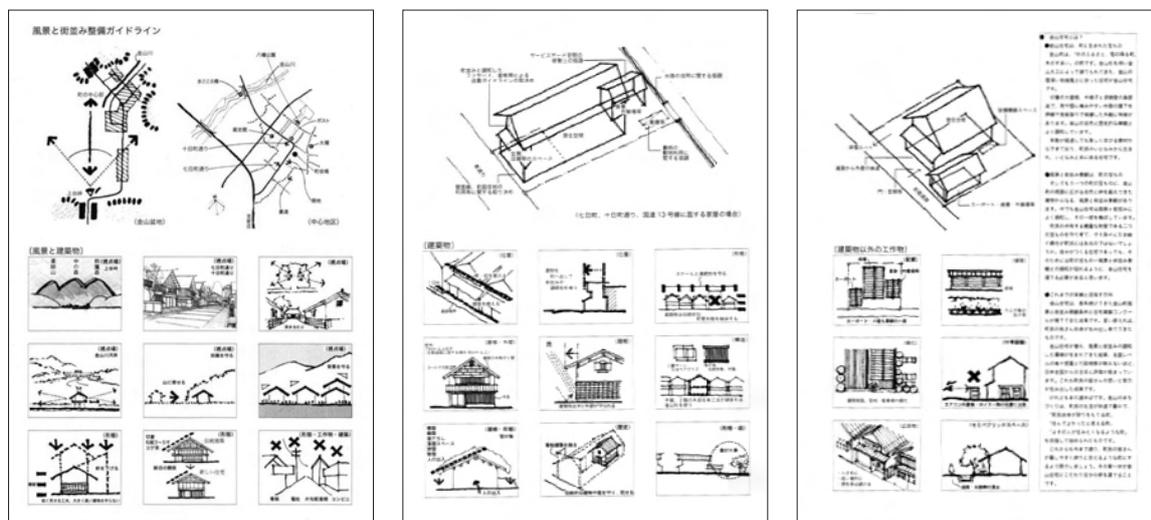
町も、可能なものから直ちに検討に着手し、平成23年からは100年運動の一層の推進のため、

平成14年から休止していた「ドイツ研修」を再開するとともに、平成24年6月には条例名を「金山町の風景と調和した街並み景観条例」に改め、前文に「金山の産材、金山職人の技術、金山町民が独自に創り上げた外観と内部の仕上げに特徴を持つ」と金山住宅の理念を明確に記載し、目的が条例名などからよりわかりやすくしたところがあります。

また、平成25年4月には街並み形成基準を時代に即した内容でより分かりやすく整理、改正したところであり、「風景と街並みづくりの案内書」の最新版による啓発にも力を注ぐとともに、平成24年からは大工・職人研修事業にも取り組み、現代の名工である鶯工舎創設者の小川三夫氏から伝統建築と人づくりや町づくりの視点でご指導頂いております。

先にご紹介しましたように、当町の街並み景観づくり100年運動、更にはHOPE計画の具現化策とも位置付けられています「街並み景観条例」による町づくりは順風満帆という訳にはいかず、特に近年は大きな岐路に立たされています。

しかし、当然のようにこうした町づくりには



街並み景観形成の主なガイドラインのイメージ図

特効薬はありません。運動や計画の原点に立ち返りながら、様々なアクションを積み上げ、町民とともに地道に運動を展開し継続していく以外にはないものと考えています。

また、昭和61年に町民から受け入れられてスムーズにスタートしました「強制力」や「罰則」のない支援型条例ではありますが、平成17年に全面施行された景観法を活用した景観施策の導入議論も何度かあったものの、「まちづくりの主役はあくまでも町民であり、行政と住民の連携と強調、信頼の中で理解と共感を得ながら、身の丈にあったまちづくり」をゆっくりと着実に進めるためにも、現在の独自条例を基本とした「町民運動」として次世代の主役となる町民とともに進化させていかなければならないと考えています。

こうした厳しい現状がある一方、最近のある調査でとても興味深いデータもあります。金山町を含む新庄最上地域8市町村の中で金山町内の高校3年生の定住意識は非常に高いものでありました。この年代は全員が平成生まれで金山町の取り組みが線となり、面としてつながり既に「金山らしい魅力的なまち」として高い評価を得ている時期に生まれ育った年代でもあるのです。

○100年先も金山らしく美しく

～各世代が織りなす生地を繋ぐ～

こうした若者たちや子どもたちは、金山町の未来を担う世代であり、期待が掛けられている世代でもあります。現在、年間12万人余りとも言われる来訪者の多くが、街なか散策を楽しむ傍らでこうした金山の若い世代とも出逢い、声を交わす機会も多くなっています。

前述の都市景観大賞「美しい街並み大賞」の講評でも単なる街並みの美しさだけでなく、「町

民の定住意識が高く、景観形成の効果が新たな段階まで至っている」との高い評価を得たことが今後の大きな指針となっています。

こうした中、多くの来訪者と町民の交流拠点施設として、町中心部に現存している貴重な蔵を改修して平成23年から整備してきました「マルコの蔵」も完成し、古き良きものを活かした新たなスポットも誕生し、HOPE計画策定から30年で「風景と街並みの調和した街並みづくり」の中核エリアの全体像が整ってきたようにも思います。

加えて、全国でも殆ど例のない形での地域住宅の供給にも取り組んでいます。少子高齢化の進展に伴う人口減少社会の中で、確実に増えている街なかの空き地に若者世代の定住を目的とした木造戸建て住宅となる「街なか公営住宅」を年4棟のペースで建築し、5年間で計20棟を提供していきます。

平成25年春には2階建ての4棟が完成、その全てに若い世代の家族が入居し、地域のコミュニティーを保持しながら新しい「金山住宅」の中で金山暮らしを楽しんでいます。

今年度は平屋建てタイプ4棟の建築が順調に進んでおり、来春にはまた新たな4家族が新生活をスタートします。

そして、先の愛知県豊田市足助での最後のHOPEシンポジウムにおきまして、奨励賞の栄に浴することができ、今後につながる受賞と関係者一同とても感激しております。

また、新しい芽吹きも感じています。これまでの30年間、一貫してご指導頂いています専門家の先生方との話でも若い世代との関わりを模索することや若い世代の大工・職人との意見交換の場が必要との共通認識も生まれています。

いずれにしても、これからの若い世代と共にこれまで多くの成果を上げてきた「100年運動」



新金山住宅の提案一街なか公営住宅

や「HOPE 計画」を土台とした次なる町づくりの方向性を一緒に考えていくべき時期であることは確かなようであります。

まもなく、「100年運動」提唱と「HOPE 計画」

策定から30年。今日から100年先も HOPE(希望)ある町であり続けるためにも、これまでの成果を確認し合い、次なるステップにつなげていく場面が必要ではないかと考えています。

それは、景観や住宅に関わる表彰制度の再構築であり、運動や計画の推進体制の再構築であり、町民の意識の再構築の場の設定であるのかもしれない。

私の中でも、まだ具体的なものは見えていませんが、これまで各世代が織りなしてきた町づくりという生地を繋ぎ合わせる作業を継続し、100年先も金山らしく美しくあり続けたいと願ってやみません。

金山町の「100年運動」は「HOPE 計画」とともに歩み、大きな相乗効果をもたらしてきました。街並み景観づくりという終わりのないまちづくり施策は、30年目を迎えた今も始まったばかりで、HOPE 計画ともどもこれからが正念場です。

30周年という節目の年にあたり、これまで長年にわたり当町のまちづくりにご指導頂きました皆様はこの紙面をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

「造景」2000年9月号建築資料研究所

